論　文

李外秀『勲章』について――父親との葛藤

田　川　光　照

要　旨

本稿では，韓国の現代作家李外秀のデビュー作『勲章』を取り上げ，この作品の執筆動機を紹介してから，メインのテーマとなっている主人公と父親との葛藤を中心に考察する。まず，主人公および継母に対する父親の残忍な暴力と，父親の主人公に対する自己中心的な期待は，父親が現実世界と親和性を持ちえない人間であることから生じていることを示す。その背後にあるのは，父親の片腕がないという劣等感と，過去の戦争中の武勇によってしか保持しえないアイデンティティーのあり方である。そして，父親の自殺後，美術大学の絵画科学生になっている主人公が彷徨の末に父親を客観化し，父親をモチーフに折り込んだ山犬の絵を描くことによって父親と和解する過程について考察する。そこにあるのは，過去の功績の証しに過ぎない勲章によって象徴される過去による支配からの脱皮であり，生まれ変わりである。

また，李外秀の芸術至上主義的芸術観についても示唆する。

キーワード：李外秀　勲章　父親　憎悪　暴力　サディズム　アイデンティティー
劣等感　現実　過去　芸術至上主義

はじめに

本稿で取り上げる中編小説『勲章훈장』[1]は，韓国の現代作家李外秀(イ・ウェス)のデビュー作である。

李外秀は1946年に慶尚南道(キョンサンナムド)に生まれ，小学校から高校時代まで江原道麟蹄郡(カンウォンドインジェ)で過し，1965年に同じく江原道の春川(チュンチョン)教育大学に入学する。本人は画家志望で美術大学に進学したかったが，絵では食べて行けないという周囲の反対で，やむなく春川教育大学に進んだのであった。1968年から1971年までの陸軍時代をはさんで，結局1972年に同大学を中退する。在学時代は，もっぱら美術室に入り浸りで絵ばかり描いていたという。もともと画家志望であったというこの側面は，彼の文学作品に大きな影響を与えている。小説の中では，本稿で取り上げる『勲章』の主人公が画家志望生であり，長編小説『山犬들개』に登場する主人公の男も画家志望生である。『夢見る植物꿈꾸는 식물』その他の小説にも絵画のモチーフが姿を見せる。それだけでなく，詩集『恋しさも化石になる그리움도 화석이 된다』のように，詩と自らの挿し絵を組み合わせた「詩画集시화집」があれば，『お師匠様，おっしょう様사부님 싸부님』のような「寓画集우화집」と称する作品もあり，自らの挿し絵を入れたエッセイ集などもある。さらに言えば，この作家には芸術至上主義的傾向が強く見いだされるが，このことにも関係しているかもしれない。

それはともかく，大学時代，およびそれ以後の数年間，極貧生活を送っている。下宿代が払えなくなり，橋の下や煉瓦工場にもぐり込んで夜露をしのぐという，ホームレス生活まで経験したらしい。その極貧生活の中で初めて小説を書いたのは，『勲章』よりも4年ほど前に遡る。1971年に陸軍を除隊して間もなく，やはり春川教育大学の学生であった詩人チェ・ドンソン최돈선と出会い，共同生活をすることになった。そして，ある晩のことについて李外秀は次のように回想している――

> 私は，彼を支えている力は詩にあると思った。私も詩を書きたいという強い衝動にとらわれもした。
>
> しかし，死んで生まれ変わったとしても，詩人チェ・ドンソンほど詩を愛し，真に詩人らしく生きることはできないという気がした。
>
> 「小説をいちど書いてみるか」
>
> ある日の夜，私は勇気を出して彼に言ってみた。『江原日報(カンウォンイルボ)』新春文芸の締め切りが翌日に迫っていた。
>
> 「うん，お前なら書けるだろう」
>
> 彼が私に勇気を与えてくれた。うん，お前なら書けるだろう。このひと言が私を小説家にした。その夜，私はやっつけ仕事をするように短編小説1編を急造し，その小

説が『江原日報』新春文芸に当選した。[2]

この短編小説は『見習いの子供たち견습 어린이들』であるが，これによって文壇にデビューしたわけではない。この作品の当選後，前述のように1972年に大学を中退してから，1973年に江原道麟蹄南国民学校客谷(ケッコル)分校に小使として住み込み勤務することになる。この分校は山奥の火田民が住む村にあり，全校生徒17名，農繁期には生徒も農作業に駆り出されるため登校する者はほとんどいず，農繁期が終ってからも登校する生徒はせいぜい5名程度という学校であった。教員としては分校長がいるだけで，しかもその奥さんが病気のためしょっちゅう欠勤するので，李外秀が代わりに授業もしたという。

この分校時代に書いたのが，デビュー作となった『勲章』である。この作品を書いたのは2つの借りを返すためであったと，作家は次のように書いている。

> 私がこのような深い山奥に自ら島流しになったのは，文学に対する2つの借りを返そうという意図によるものだった。
>
> 1つ目は，『江原日報』新春文芸で私を当選させてくれたキム・ドンニ김동리先生とユ・ジュヒョン유주현先生に対する借りを返さなければならなかった。この方々は，私が応募した短編小説は多少未熟で稚拙ではあるが，将来個性ある作家に発展する素地のほどが窺われると，当選理由を明らかにしていた。もし私が個性ある作家に発展できなければ，その方々は，間違いなく，当時『江原日報』新春文芸に関心を持っていた人々から，見る目がない作家だと評価されるだろうという気がした。
>
> その方々は，文壇の大物だった。しがない市井の雑輩ひとりのために，その方々の名誉を失墜させることはできなかった。
>
> 2つ目は，文学のために一生を捧げた古今東西の諸々の文人たちに借りを返さなければならかった。私は，あまりにも寒く空腹だったので新春文芸に応募しただけだった。もっと率直に言えば，賞金に目がくらんで新春文芸に応募しただけだった。しかし，時間が経つほどに，私は罪責感にとらえられはじめた。文人たちが生涯を捧げて崇拝してきた文学を，たかだか寒さや空腹に耐える一時的な手段にしたという事実に，嫌悪感までこみ上げてくるほどだった。
>
> 私には，この2つの借りを清算する方法が分かっていた。渾身の努力を傾けて，感動的な小説を書くことだった。[3]

こうして，「渾身の努力を傾けて」書き上げたのが，中編小説『勲章』であり，1975年，『世代』誌で新人文学賞を受賞する。

この小説は主人公イム・ウォニル임원일の1人称（「僕」）で語られ，主人公と父親の葛藤をメインのテーマにしたものである。その構成は「1. 古い日記帖」「2. 秋の会話集」「3. 幻生集」[4]という3つの章からなる。「古い日記帖」では，「僕」の幼年時代から父親の死までが語られ，「秋の会話集」では，美術大学絵画科の学生となっている「僕」と同じ絵画科の学生で女流詩人を目指すチュニ준희との交際，春川方面への旅行等々の話が語られる。そして「幻生集」では，絵画科に編入学してきたノ・ファンチョル노환철と共同生活をはじめ，山犬の絵を完成させるまでが物語られる。以下では，「僕」の父親に対する憎悪が語られる「古い日記帖」での人間関係をまず概観した上で，「僕」が父親を理解し山犬の絵を描くにいたる「秋の会話集」以下での「僕」の葛藤について考察することにする。

父親をめぐる葛藤の発端

「僕」の父親は「狂犬미친 개」という異名を持ち，気に障ることがあれば人に頭突きをくらわす凶暴な人間として恐れられている。「僕」にとっても最もうんざりする存在である。父親の唯一の自慢は勲章であり，暇さえあれば金ぴかに磨いている。また，父親には片腕がないが，それは朝鮮戦争でなくしたのであった。

> 家に客が来さえすれば，僕に酒をとってこさせ，ほろ酔いかげんになると，大きな声で武勇談を並べ立てた。素手で人民軍5人を殴り殺してしまったという話。父はとくに素手を強調したが，客たちはたいてい信じなかった。すると，父は必ず勲章を出して見せた。
>
> もし，話の途中で，忙しいという口実で客が帰ってしまうと，父は決まって僕を呼んだ。そして，さっきよりも少し気抜けした声で，その武勇談を最後まで聞かせた。何々高地を奪還し，何々部隊を皆殺しにし，あげくの果てに素手で人民軍5人を……。[5]

父親は家で酒ばかり飲んでいるが，名うての花札賭博の打ち手で，冬になると各地の賭場に遠征に出かける。ある冬のこと，父親は莫大な金を持って帰ってくる。それをさかいに「僕」と父親の生活は一変，新しい家ができるとともに，男やもめであった父親は後妻を迎えることになる。その後妻には「僕」より1歳下の娘イニョン인영がおり，4人の生活がはじまる。

後妻，つまり「僕」の継母は日曜学校の班師であり，日曜日になると「僕」は教会に連れていかれるが，教会は「僕」にとって退屈この上ない場所である。「捕虫網のような形をした献金袋」が回ってくると，「僕」は継母からもらっていた小銭をその袋のなかに入れる

ふりをして，袋の中の小銭を一枚くすねるという悪さをすることに楽しみを見いだしたりするが，それにも飽きてしまう。そうこうするうちにある日のこと，ついに教会で一悶着引き起こすことになり，父親に折檻される。

> その日の夜，僕は父にひどく鞭打たれた。そして，雪が積もった庭の真ん中で，継母が礼拝を終えて帰ってくるまで裸足でひざまずいていた。僕は逃げることができなかった。父は僕の手足と体を綱できつく縛ったのだ。
>
> ああ，その時の寒さと痛さをどう表現すればよいのか。全身に深く食い込んだ刃，きびしくひりひりするような風が絶え間なく僕の肉体をかみちぎり，僕の全身は，乳離れした子犬が見知らぬ家に売られてきた時のようにぶるぶる震えていた。顔がこちこちにこわばってき，脚がこちこちにこわばってき，ついには体全体がこちこちにこわばってきた。四方で，冬の伏兵どもが歯をきらきら光らせながら，僕をねらっていた。風が攻め寄ってくるたびに，雪の粉が僕の小さな体に覆いかぶさった。
>
> (中略)
>
> 空には月が浮かんでいた。月は冷たく冴えていた。僕は冷え冷えとした空を見上げながら，父を憎悪し，継母を憎悪し，教会を憎悪した。[6]

こうして，「僕」にとって継母も父親も憎悪の対象となる。しかし，それだけでなく継母の娘イニョンもまた「僕」の気に入らない。イニョンのほうから「僕」に話しかけることもなく，「僕」が彼女に何かをやろうとしても受け取らない。ついに「僕」は彼女をひどい目にあわせてやろうと考えるようになり，共同ごみ捨て場から子犬の死体を拾ってきて彼女の部屋に投げ入れる。しかし，彼女は叫び声を上げもしない。「僕」が部屋の戸をそっと開けてみると――

> いったいどうしたことか。娘は眉ひとつ動かさず戸の前に立っているのだ。なんと，片手には子犬の死体がぶらさげられている。僕はまたもやうろたえ，額に冷や汗を流し，ついで気がすっかりめいってしまった。娘はしばらく正面切って僕を凝視していたが，静かに戸の外に歩み出てきた。そして，落ち着いて便所のほうに歩いて行ってしまった。[7]

この出来事があってから，「僕」はこの娘に気後れしながらも，彼女の関心を引きたいという二律背反的な感情を持つことになる。

ともかく，こうして4人の生活がはじまったわけであるが，「僕」が高等学校に進学した

頃から，この生活は徐々に崩壊へと向かって行く。その中心にあるのが，父親の感情の揺れと暴力である。

父親の継母に対する暴力

「僕」が高校時代の一時期，父親はある工事現場で監督の職を得，意気揚々と軍歌を歌いながら現場へ出かける。

> 思うに，父は不具［片腕がないこと］による疎外感あるいは劣等感を解消する場所にいまや巡り合うことになったのだった。腕を2本とも持っている人々を監督する権利，そして義務。これらは，父にとってとても楽しいことであるほかなかったのだ。[8]

一時影をひそめていた「頭突き」も人夫たちに対して復活する。しかし，監督の交代を要求のひとつとしてある日人夫たちが労働争議を起こし，父親は現場監督の職を失うことになる。それ以後，父親の暴力が家庭を蹂躙しはじめるのである。

それはまず継母に対する嫉妬の形で現われる。「誰によく見られようと化粧をするんだ」[9]としょっちゅう怒鳴りつけることからはじまり，父親が空吐気（からはきけ）を催すようになり，さらに下血するにいたって事態は悪化する。酒を飲めなくなり，毎日部屋で横になってタバコばかりふかしている父親は，継母に対してますます神経質になり，彼女を常に自分のそばに置いておこうとする。しかし，日曜日になると日曜学校の班師である継母は教会に出かける。父親は継母が教会で何をしているのか，牧師はどんな人物か，等々について知りたがり，「僕」は父親の誘導質問に引っかかって教会で見たことを話してしまう。

> 牧師は未婚の男性であること。若く健康で，男前であること。継母は誰に対しても優しくて，すべての人が好きであること。いつだったか，牧師の衣類を洗ってやったこと。[10]

これが父親の嫉妬心を燃え立たせることになり，継母がごみを捨てに行っただけでも「誰に会ったんだ」と詰問するばかりか，継母を監視し，外部からやって来る，たとえば電気修理工のような人々にまで継母との関係を疑うようになる。継母は，思いのままに教会へ行くことができなくなったばかりではない。便所に行くことさえ父親の許しを得なければならないほどである。洗濯をしに行って帰るのが遅くなっただけでも鞭打たれる。毎日のように継母の悲鳴が聞こえるようになる。しかし，継母は無抵抗で，ただひたすら神に祈

るばかりである。

こうして1年間が過ぎると，父親の態度に変化が現われる。継母が病に伏せると，徹夜で看病し，自ら台所で重湯を作ってやったりするのである。そればかりではない。継母を監視することはやめないまでも，彼女の前にひざまずいて，自分を見捨てないでくれと哀願さえする。

しかし，ある日のこと，継母が父親に知られずにこっそりと家を出て教会に行くと，父親は狂ったように彼女を探しはじめる。しかし，彼女の行方を見つけ出すことができない。継母は祈祷室で祈っていたのだが，父親は祈祷室の存在を知らなかったからである。継母は一晩を祈祷室で過したのち，翌朝帰宅する。すると，彼女は庭で父親の激しい暴行を受ける。「僕」は制止しようとするが，父親に殴打され，とめることができない。父親は狂ったように継母を殴り続ける。

> 突然にも突然，継母がひと声，鋭く吐き出すように叫び，恐ろしい顔つきで地面からぱっと立ち上がったのには，本当に身のすくむ思いがした。
>
> 「殺せ！ この犬畜生にも劣る奴め。あんたもわたしもくたばればいい」
>
> 継母の目からも真っ青な狂気が漂っているのを僕は見た。はじめての反抗，この突然の事態を前に父はぎくりと体をこわばらせた。瞬間，継母は飛びかかって父の胸元に強くかみつくと，そのまま失神してしまった。[11]

その夜，継母は娘を連れて逃げてしまう。こうして，4人の生活は崩壊し，父親は勲章の代りにナイフを磨きはじめる。

継母に対する父親の感情の動きはかなり明白であるように思われる。暴力にいたる父親の嫉妬が継母に対する愛に由来していることは，温厚な態度への変貌からも分かることである。ただし，ただそれだけのことであれば，当たり前のことにすぎない。愛なしに嫉妬が芽生えることは考えられないからである。この父親の感情の動きについて見過ごしてならないことは，彼の劣等感とアイデンティティーの問題である。

片腕を戦争で失い不具者となったという劣等感を持つ父親は，朝鮮戦争時代の武勇の中にしか自己の存在理由を見いだすことができず，酒を飲んではその武勇談を語り，勲章を磨くことでアイデンティティーを保持している。それは，暴力を自己の拠り所としているということにほかならない。「人民軍5人を素手で」殴り殺した彼は，いまや「狂犬」という異名を持つ凶暴な人間としてしか生きることができない。一時工事現場の監督として雇用された際にも，人夫たちに「頭突き」をくらわしては，酒を飲ませて自分の武勇談を語る。人夫たちが労働争議を起こしたその要求のひとつは，監督を交代させることであった。彼

は現実世界と親和性を持つことのできない徹底して孤独な人間なのである。

継母はこの孤独を埋める唯一の人間であるとも言いうる存在である。それゆえ，彼は病的なまでに彼女を自分の傍らに置いておこうとし，彼の行動はサディスティックなまでの嫉妬および暴力と，マゾヒスティックなまでの哀願（「自分を見捨てないでくれ」）との間で揺れ動くのである。

僕の父親に対する憎悪

次に，「僕」と父親との間の葛藤について見る。

上で，父親は現実世界と親和性を持つことのできない孤独な人間であると述べたが，継母とその娘がやって来るまでは，「僕」がその孤独を埋める存在であった。

> 父はどうしてそれほどひとりでいたくなかったのか。継母がわが家へ来て住むまで，僕は気楽にめんこ遊びをしたことは一度もなかった。学校へ行って勉強する時間を除いては，僕の時間のほとんど全部を父といっしょに過さなければならなかった。[12]

継母が来てから，「僕」はこれから解放される。しかし，すでに見たように，教会でのひと騒ぎのために「僕」は父親から残酷な折檻を受け，父親を憎悪することになる。しかし，父親は「僕」を憎悪あるいは嫌悪しているわけではない。むしろ「僕」に期待を抱いているのであるが，「僕」にはそれが煩わしいだけである。

> この頃，父はある工事現場で監督の仕事を受け持っていた。夜になると，毎晩酒に泥酔して家に帰ってきた。帰ってきては，必ず僕を前にひざまずかせて長い長い演説をはじめるのだった。父のどんな演説も，僕は聞くのが煩わしかった。たいてい，まったく同じ話を何度も繰り返したからだ。勉強をよくしろ，孝行者になれ，金をたくさんかせげ，勇ましくなれ，アインシュタインを，シムチョン[13]を，オナシスを，ナポレオンを，みな自分のものにしてくれと父は僕に頼んだ。
>
> 「やあ，ぼうずがもうこんなに大きくなったんだなあ。おい，お前はきっと成功してこのおやじの片腕になってくれなければいけないんだ」[14]

父親が人夫を家に連れてくると，武勇談のほかにする話といえば「僕」についての自慢話である。こんど息子が級長になったといった嘘まででっちあげる。父親の「僕」に対する夢は「僕」を大学に入れて検事にすることである。しかし，「僕」に興味があるのは美術

であり，高校1年の秋，道の教育委員会主催の実技大会で「僕」の水彩画が特賞を取る。しかし，「僕」を褒めてくれるどころではない。

> 「たかが三文画家になろうってわけか。こいつ，飢え死にしようなどと，気がおかしくなったな。おい，検事になれと言ったろ。このおやじが，いつお前に飢え死にしろと言った」[15]

「僕」には父親の期待に応えてやりたいという思いがないわけではない。しかし，美術大学を受験することに決める。

> どんなことがあっても大学だけは行かなければならないという考えが，始終僕を支配していた。父の願いにまで達するには，いまの僕の実力ではとうてい不可能であり，残りの3か月間を，アルミボール何杯分もの鼻血を流して勉強したとしても，自信がつくようには思えなかった。僕は検事になることを放棄してしまった。父には申し訳なかったが，実力がないのだからどうしようもない。美大なら難しくない。どんなことでも，自信があることに挑戦するのが賢明というものだ。僕は賢明にもミケランジェロの後裔になることに決心を固めた。[16]

このような，父親の期待と「僕」の意思との間でのすれ違いのほかに，父親の継母に対する暴力を媒介にした「僕」と継母の娘イニョンとの関係の変化をも見ておく必要がある。「僕」とイニョンの関係は，前述のように，はじめのうちは水と油のような関係であった。「僕」の方はイニョンに関心があるのだが，彼女の方は「僕」をまったく相手にせず，とうとう「僕」は彼女の部屋に犬の死体を投げ入れるほどであった。しかし，この関係が父親の継母に対する暴力とともに変化することになるのである。イニョンはいつの間にか部屋の片隅に金網を張って何匹ものシロネズミを飼うようになっていた。彼女はそのシロネズミを殺すために飼っていたのだが，いつしか「僕」は彼女と一緒になって毎日1匹ずつ殺すようになる。「僕」がひもでネズミの首を絞めて殺すのに対して，彼女の方はもっと残忍で剃刀でネズミの首を切開して殺すのであった。さらに二人は，実行しないまでも，より残酷な殺し方を夢想する。

> 尻にガソリンを浸して火をつけてから，野原に放せ。夜にやるのがよい。生きるためにどれほど速く走ることができるだろうか，そんなものが走ってこそ焼肉（プルゴギ）だ。歯を全部抜いてから傷がついた歯茎に針を2本ずつ突き刺して，どこにでもよいから放り

出せ。結局は飢え死にすることになるだろう。死体だけはちゃんと埋めてやること。脚に重い鉛の塊をぶら下げてやってから，すぐ前にゴマ油を塗ったサツマイモを置いてやるように。絶対に口が届かない距離に置いてやらなければいけない。食べるためにもがいているうちに気力が尽きてしまうだろう。その時，アカヤマアリの巣に持っていけ。毛には蜂蜜を塗っておくのがいっそう効果的だ。[17]

父親の継母に対する暴力を介して，こうして「僕」とイニョンの関係はネズミ殺害の共犯関係を経て親密化するのである。そして，それは愛まで高まる。「僕」が美大を受験する決心をしたのちのある日のこと，「僕」はイーゼルを庭に据えて，板の間で編み物をしているイニョンを描きはじめる。そして――

僕は，娘を長い間凝視していた。そしてようやく，娘がとても美しいことを悟った。ひょっとすると，彼女は，わが家へ来ることになったその日から，僕のように涙だけを心に秘めて，僕のように荒涼とした野原をさまよい，僕のように誰とも親しくできない日々の中に生きろと，神様が耳打ちして言い聞かせたのではないか。まさに僕のように――という気がするや，僕はたちまち彼女が限りなくいとしく感じられ，そうして心の中に初めてときめきを感じて，こっそりと彼女の名前を呼んでみた。

「イニョン……」

ところが，実におかしな現象が起こった。明らかに僕は彼女の名前を声に出さずに心の中で呼んだにもかかわらず，彼女はまるで自分を呼ぶ声を聞いたかのように，黙って頭を上げたのだ。そして，静かに僕を眺めた。ああ――その時僕の心を流れて行った，その理解できない平穏な水流の音，静かに押し寄せて僕の全身を浸していたその音楽の正体は，何だったのか，何だったのか。[18]

二人の間に芽生えたこの平穏な感情も，しかし長続きはしない。父親の残酷な暴力に耐えかねた継母が娘を連れて家を出てしまうからである。

「僕」とイニョンのネズミに対するサディズムとでも言うべき行為は，もちろん父親の継母に対するサディスティックな暴力からの逃避である。しかし，これは同時に「僕」と父親を結ぶ唯一の絆でもある。というのも，父親を憎悪する「僕」が，喧嘩になると父親と同一化するからである。継母が家を出てから「僕」は級友のひとりのもとに転がり込むが，その級友と親しくなったきっかけは喧嘩を通してであり，「殴られたぶん殴り返してこい」[19] という父親の言いつけに従って，「僕」が殴られても殴られても相手が根負けするまで連日闘ったことにある。また，「幻生集」において「僕」がファンチョルと親しくなるの

も喧嘩を通してであり，その時にも「僕」は「殴られたぶん殴ってこいと父が言うのでね」[20]とファンチョルに言うのである。

それはともかく，継母が娘を連れて家を出てから，父親は勲章ではなくナイフを磨くようになるが,「僕」はますます父親を憎悪するようになる。父親はナイフを磨きながら,「おい，この野郎，お前もおやじを裏切ってみろ。目ん玉をほじくり出してしまうからな」[21]と「僕」に釘を刺すが,「僕」はついにある晩，父親が寝入ったすきに父親の金と勲章を奪う。

> 僕は，徹底的に残忍になりたかった。それで，とうに輝きを失い鉄の固まりに過ぎない勲章までも，父の胸からかすめ取ってしまった。[22]

こうして,「僕」は家を出て，同級生の部屋に転がり込むのであるが，しばらく経ったある日のこと，父親はナイフで首を刺して自殺してしまう。

「僕」が父親を憎悪するのに対して，父親は「僕」を憎悪しているわけではない。むしろその逆である。たしかに，父親は「僕」をひどく折檻することもあるが，継母が家にやって来るまでは，父親は「僕」を常にそばに置いておこうとし,「僕」が高校時代には,「僕」に対して大きな期待を寄せていたのである。しかし，父親が「僕」をそばに置くのは自分の孤独を埋めるためであり，その孤独を埋めるのは「僕」でなくてもよい。継母が来てからは，継母が「僕」に担わされていた役割を引き受けさせられることになるのである。また,「僕」への期待は，過去の武勇の中にしか自分のアイデンティティーを持つことができず，現実世界と親和性を持てない父親の代償行為と見なすことができる。真に息子のためを思ってというよりも，人生に敗北した自分の代償を息子の中に求めているのである。それゆえ，彼が抱く期待は自己中心的なものでしかなく，息子の意志を尊重するという姿勢はまったく見られない。これは，父親が継母の意志をまったく尊重しないことと同様である。「僕」が一方で父親の期待に応えてやりたいと思いながらも，父親の自分および継母への暴力が重なって，結局は「僕」にとって，父親は敵でしかないのである。

> 父はひとえに僕の敵であるだけだった。僕の成績表の保護者欄に名前3文字が書かれているという事実さえもいやなほどだった。敵と保護者との距離はあまりにも遠く，異なる意味であったが，僕には同一人として存在していた。それは，幼年時代を経て少年時代に至るまで，僕の胸中にこびりついているすべての悲しみの中で，最もつらくて深い悲しみだった。[23]

こうして,「僕」は父親のアイデンティティーの保証であった勲章まで奪うことになるの

である。

父の肖像

以上に見たのは「古い日記帖」における登場人物の相互関係である。次に,「秋の会話集」と「幻生集」における「僕」の心の動きを見る。

「僕」は美術大学絵画科の学生になっているが，父親の記憶が頭から離れず,「憂鬱症」になっている。次に引用するのは，絵画科の学生で女流詩人を目指すチュニとの喫茶店でのやりとりの一部である。

> 「世の中に対して未練はありますか」
>
> 「国民学校4年生の時，僕とペアになった子が好きだった。頬っぺたがすごくきれいな子だったよ。毎日一度だけでも手のひらに触れたら，と思った」
>
> 「手足をいつも洗ってましたか」
>
> 「父が保健所の所長だった」
>
> 「今後，どんな人物になりたいのですか」
>
> 「どうせ僕はアヘンを飲んだんだ。当然，芸術家だよ。飢え死にするんだ。必ず検事になって，人を監獄にぶち込む仕事を手伝ってやらなければいけないんだけど。でも，飢え死にするのもいいさ。はらわたがきれいな状態で死ぬというのは，どれほど人間的かというわけさ」[24]

このとりとめもない会話の中に，はっきりと父親の影を見ることができるが，二つのことに注意しておきたい。ひとつは，芸術家と検事の対立である。この対立関係は後の作品，たとえば『夢見る植物』などにも現われる。ここに，芸術至上主義とも言いうる李外秀の芸術観がかいま見られるが，それはさておくとして,「僕」が検事になることは父親の願いであったわけである。また，芸術家は飢え死にするという言葉は父親の言葉でもあった。「僕」は父親の願いをかなえてやらなかったことに対する心のわだかまりを自虐的に述べているのである。もうひとつ注意すべきは,「父が保健所の所長だった」と嘘をついていることである。しかし，この嘘は，実際には嘘ではない。というのも，会話は次のように続いていくからである。

二人の席の横に水槽が置かれており，その中に南アメリカ産の青ガメ2匹とワニ1匹が飼われている。それらが居眠りをしているのを見て――

「こいつらは全部偽物だろう。青ガメだなんてとんでもない。貯水池から拾ってきたものさ。ワニもそうさ。20年ほどたったトカゲ」
「何で証明できるの」
「父が動物学者だった」[25]

チュニは聞き流して，「もうすぐ冬になるわね」と話題を変えてしまう。さらに，喫茶店を出てからも，「僕」は「父は船長だった。オナシスが乗る船の……」[26] と言うのである。このように「僕」は次々と父親に異なる職業を割り当てるのであるから，「僕」はチュニをだますための嘘を言っていることにはならない。「僕」は父親に架空の仮面をかぶせることによって，父親をいわば無化しようとしているのである。逆に言えば，それだけ父親の姿が，あるいは父親と過した過去が，「僕」の心の中に重くのしかかっているのである。
「僕」は大学がロックアウトされたのを機に旅に出る。その目的を「僕」は次のようにチュニ宛ての手紙に書く。

春川。あの濃い霧の都市へ。そこへ行って何をしなければならないのか，いつ頃戻ってくるか，まだ僕には分かりません。ただ，そこに今でも残っていると思われる僕の暗い日々の痕跡を，すべて消すことさえできれば，僕は憂鬱病を少しは治せるというわけです。[27]

春川に赴いた「僕」は昭陽(ソヤン)ダムに行き，そこから1時間半の船旅の末，プムゴルリ품걸리の船着き場で下船する。そして，さらに山中の道を数時間歩き，夜明けに友人が教師をしているプルゴルリ国民学校プマン품안分校に到着する。しかし，友人は西独に行く恋人を見送りに春川へ行っており，会うことができない。
しかし，この旅で「僕」はひとつのことを悟り，チュニへの手紙で次のように書く。

いまや僕には分かります。この世の中で最も徹底して不幸で，徹底して孤独だった人はまさに僕の父であることを。僕は父の勲章を一生懸命に磨きながら，僕の愚かさと罪深さをじっくりと考えてみるつもりです。[28]

こうして「僕」は父親の真の姿に気づくのである。そして，編入生のファンチョルと起居を共にしながら，父親をモチーフに折り込んだ山犬の絵を描きはじめるのであるが，そのことを通して次第に父親に接近していく。

いつかは父の全部を画幅の中に収めてみようと何度ももくろんできたが，父のあの不幸と暗闇をあえて僕が何で表現することができるのか苦心し，僕はいつもためらってきた。しかし，検事にならずに画家になろうと踏み込んだ僕の道についてだけは，それほど父に申し訳なさを感じなかった。その道は父の道ではなく，すでに僕が歩んでいる道なのだから，歩いていて倒れることがあっても最後まで歩いてみなければならないのではないか。すでにその道は僕がみずから選択した道であり，死までつながっている道だ。問題は，僕が敗北せずに何らかの痕跡を残し，最後まで歩いていくことができるか，ということだ。

父は敗北したのだろうか。そうだ。敗北したのだ。父の孤独な生涯の中でひたすら力としたこの勲章ひとつを残して，徹底した孤独に身もだえしながら死んでいったのだ。

僕は大学に通いながら，いつもすまない気がしていた。とくに，父の財産を整理した金を銀行に預金し，僕の力不足のためにその金を引き出して使うたびに，僕はいまでも父の洋服のポケットをひっかき回しているような気がしてつらかった。

しかし僕だけは，不幸の中に生きても，そのように敗北はしまいといつも父に誓って生きてきた。

僕は男［ファンチョル］の部屋に移ってきてから数えきれないほど多くの山犬を習作した。しかし，山犬はひっきりなしに犬のような絵になり，そのたびに僕は世間に対する憎悪と愛情が不足していることを痛感したりした。[29]

この引用文で述べられていることは,「僕」の父親に対する全面的な理解＝客観化と「僕」の父親に対する罪責感の自覚，そして「僕」が芸術家として生きていくことについての決意である。特に最後の点に関しては，自分が自ら選択した道を歩くことが人生に敗北しない道であるという自覚のもとに語られており，もはや先に引用したチュニとの会話にみられるような自虐的な語りではない。

ところで,「僕」は山犬の絵の中に「父の全部」を収めようとするのであるが，山犬らしい山犬を描くために「僕」は残忍な行動に出る。その展開の部分は,『勲章』の中でも圧巻の部分であり，やや長くなるが以下に紹介したい。

僕は，雑種犬1匹を引っ張って凍りついた道端に入った。凍りついた道端は薄く雪の粉で覆われていた。朝だった。ひどく寒い朝だった。風が白く毛を逆立てて駆けていた。足の指に何十本もの針が深く突き刺さるようで，口を開けると舌の表面までこわばってしまうような天気だった。

時々，氷がひび割れる音が聞こえてきた。その音は僕の耳に幻聴となって水鬼（すいき）の泣き声に聞こえたりした。雑種犬は水鬼の泣き声が聞こえるたびに驚いてびくっとし，僕は，その雑種犬が尻尾を腹の下に巻き入れて脅えた表情で立ち止まる瞬間ごとに，ヒステリックに綱を引っ張った。[30]

こうして犬を引っ張って川べりまで行くと，綱を最大限に長くしてポプラの木に縛る。大学の射撃選手である「僕」は，犬から50メートル離れたところで猟銃を取り出す。

射手，弾丸1発装填。据銃。照尺の穴の中に雑種犬1匹が吸い込まれていた。しかし，僕が狙ったのは犬ではなかった。犬のすぐ前に置かれたひとつの錆びた缶だった。僕は息を止めた。そして，犬に当たらないように，銃弾がはねても犬に当たらないように，角度をきちんと調整して狙いを定めた。

ターン。

一瞬，缶がはねとぶのを僕は見た。そしてそれと同時に，稲妻のように体を翻して逃げる犬も見た。犬の動作は実に早かった。しかし，綱が凶暴に犬の体を引っ張ったので，犬はそのままのけぞってばたりと倒れた。犬の悲鳴が凍りついた冬の虚空をずたずたに引き裂いていた。犬は引き続き逃げようとした。しかし，綱は約70メートルほど，したがって犬は半径70メートルほどの円内だけで行動するしかなかった。[31]

そして「僕」は逃げまどう犬の鼻先の地面に銃弾を撃ち込んでは，犬を恐怖に陥れるのである。犬が恐怖のためについに狂気に達したと見るや，「僕」は犬の脚を狙い打つ。

ターン。

音と同時に僕は見た。さっと網膜に映った光線のように早い映像，引き裂かれていく犬の脚を。

突然四方は静かになった。ぴんと張った緊張だけが継続していた。犬は動かずにいた。

わき腹に当たったのか。僕は確認するつもりで数歩前に出た。その時だった。犬がぱっと起き上がったのは。

僕は素早く後ろに退いた。しかし，すぐに犬は再び倒れた。倒れては，ばたばたと脚をばたつかせた。次いで，血だらけの体を引きずって，3本しかない脚で這いはじめた。しばらくすると綱がぴんと張った。僕は用意しておいたナイフで綱を切ってやった。渾身の力を傾けて這っていた。いまや犬ではなかった。汚く醜い生命をしぶ

とくかみちぎり，すぐに裂けてぱっと散り散りになってしまうような必死のあがき，必死のあがき，必死のあがきの塊だった。悲惨な姿だった。[32]

そして，「僕」はとどめの1発を撃つのである。この場面は，「僕」とイニョンがシロネズミを残酷に殺していったことを思い起こさせる。しかし，決定的な違いがある。ネズミ殺しが父親の継母に対する暴力からの逃避であったのに対し，この場面の犬殺しは絵を描くためといういわば大義名分のもとに行われたのである。この犬殺しは，金東仁（キム・ドンイン）（1900–1951）の代表作のひとつで，芸術至上主義的作品とされる『狂炎ソナタ광염 소나타』を連想させる。この作品は天才作曲家ペク・ソンスを主人公にした短編小説で，彼は犯罪を犯すことによって名曲を産み出すが，ついには殺人を犯すまでにいたる。語り手はその作品の最後で次のように言うのである。

力のある芸術，線が太い芸術，野性で充溢した芸術――われわれは，長い間これを待ちました。そのような時にペク・ソンスが現われました。事実ですね，ペク・ソンスの芸術はひとつひとつがみなわれわれの文化を永久に輝かせる宝です。放火？ 殺人？ 取るに足りない家の何軒か，取るに足りない人間の何人かは，彼の芸術のひとつが産出される犠牲になるなら，決して惜しくありません。千年に一度，万年に一度出るか出ないか分からない天才を，いくつかの取るに足りない犯罪を口実に，この世の中からなくしてしまうことはもっと大きな罪悪ではないでしょうか。少なくともわれわれ芸術家にはそのように思われます。[33]

李外秀が『勲章』を書いたとき，1929年に書かれた金東仁のこの作品が彼の頭の中にあったかどうかは分からないが，「僕」の犬殺しは明らかにこの作品の基調に通じるものである。「力のある芸術，線が太い芸術，野性で充溢した芸術」のために，「取るに足りない」雑種犬1匹が犠牲になることは「決して惜しくない」……。

父をモチーフに折り込んだ山犬の絵を描くことで，「僕」はさらに父に対する愛まで獲得するようになる。

1か月たっても，僕の作品は完成しなかった。僕は唇に白く水膨れができ，あごひげが真っ黒に伸びていた。しかし，僕の心の中には初めて父に対する愛情が慕わしい流れとなって広がっていた。[34]

「僕」はますます渾身の力を傾けてカンバスに向かう。目まいがし，関節が痛み，ついに

は毎朝鼻血を流すようになる。そして，ついに絵を完成させる。それは次のようなものであった。

> 空は真昼だった。絵の中の空は真昼だった。雲は桜の花のように明るく咲いて，どこか遠くに流れていっていた。その空の下の山と岩は夜で，夜の黒い岩山の上に1匹の山犬が胸を張って立っていた。山犬の毛は黒く艶があり，その少しやせて眼光が鋭い山犬は空に向かって長くほえていた。脚は3本だった。その3本の脚は暗い夜の岩山をしっかりと踏みしめていた。そして，残りの1本の脚は引き裂かれて旗のようにはためいていた。真昼のような空。うららかな雲。静けさ。空にあるすべてが孤独だった。しかし，山犬は孤独を征服し，ひとりで岩山に登った孤高の姿だった。岩の割れ目ごとにヘビがぞろぞろと這い回っており，骨があちこちに散らばっていた。そして，岩山全体を詳しく見ると，プロシアンブルーのアンバー系統を混合して作り出した暗い色の巨大な父の顔だった。[35]

こうして描き上げた絵を「僕」は額に入れて壁に掛け，さらにその横に打ち込んだ釘に父の勲章を掛けるのである。こうして「僕」が父親と和解することで小説は終る。この山犬の絵をどう解釈するかが問題となるが，それについては後で述べることにし，その前に触れておかなければならないことがある。それは，父親との葛藤を越えたもう少し広い現実世界との葛藤の問題である。

現実との葛藤

主人公「僕」は父親の真の姿，つまり徹底的に孤独で不幸な人間であり敗北した人間であるという真実に気づいたわけであるが，「僕」自身もやはり孤独で不幸な人間であり，父親と同様に現実世界と親和性を持てない人間である。その苦悩の根源にはもちろん幼少年時代の父親との葛藤があるが，それは自分が見捨てられた存在であるという意識となって「僕」の精神を支配することになるのである。

まず，前に引いた引用文の中に「ひょっとすると，彼女［イニョン］は，わが家へ来ることになったその日から，僕のように涙だけを心に秘めて，僕のように荒涼とした野原をさまよい，僕のように誰とも親しくできない日々の中に生きろと，神様が耳打ちして言い聞かせたのではないか」という一文があったが，同じく「古い日記帖」の中に，次のような一節もある。

> 僕ら［「僕」とイニョン］は，ほとんど同じ時期に生まれた僕らと同じ年ごろの者たちの中で最も不幸な環境の中に生きているという事実を同類項にして，あまりにも暗くじめじめした地面で栽培されている多年草植物にすぎなかった。（中略）結局僕らは，父の見捨てられた一生涯のために，父が望む花，父が望む実を作り出さなければならなかった。しかし，僕たちはすでに不良品種として枯れていっていた。[36]

父親が見捨てられた人間なら，「僕」もまた見捨てられるほかない「不良品種」なのである。自分が見捨てられているという意識は「秋の会話集」から「幻生集」にかけてよりはっきりと自覚されていき，ついに次のような自覚にいたる。

> 僕は最近痛感していた。何かに捨てられたという事実について。しかし，捨てられたのは僕自身だけでないこともよく分かっていた。僕らは，未来が捨てられ，捨てられ，捨てられ，捨てられたのだということを。[37]

では，「僕」を捨て未来を捨てた「何か」とは何か。それは「現実」である。絵画科の級友たちが，ある日，教室でデモの準備を行っている。しかし，「僕」とファンチョルがそれに加わらないために，二人は級友たちから袋だたきにあう。その場面のあとで，「僕」は次のように述懐するのである。

> 僕らの理想がいかに絶対的なものだとしても，僕らの闘争がいかに純粋で正義にかなったものだとしても，僕らの外で現実は現実自身を破壊されることはなく，むしろ冷酷に僕らを破壊しながら，次第次第にかってに形成されていくことをまず知らなければならない。憤怒と勇気だけでは，何ものをも成し遂げることはできない。今，僕らは憤怒と勇気それ以上のものを持たなければならないのではないか。僕も，中継放送がある時にはいつもラジオをつけて，いつもわが方を応援したのだった。わが方が負ければ哀惜し，わが方が勝てば大感激したのだった。憤怒と勇気よりももっと僕らに必要なものは何なのか。[38]

『勲章』が書かれたのは，朴正熙大統領による維新体制下で民主化運動が徹底的に弾圧された時代である。1973年8月に東京で起こった金大中拉致事件はあまりにも有名であるが，反独裁民主化デモや維新憲法廃止を求める署名運動などが活発に行われ，1974年には詩人の金芝河（キム・ジハ）が死刑判決を受けている。李外秀は政治に直接コミットしないどころか，政治には無関心なのではないかとさえ思えるような作家であるが，作品が書かれた政治的時代背

景を無視するわけにはいかない。上の引用文には，そのような現実に対する諦めさえ読み取ることができるのである。現実と理想の板挟みになりながら，現実を変えることはできない。つまり，未来が捨てられているのである。「僕」はデモの中継放送は聞いても，デモに参加することはない。「憤怒と勇気だけでは，何ものをも成し遂げることはできない」とすれば，「憤怒と勇気よりももっと僕らに必要なものは何なのか」と自問する。

「僕」がファンチョルの住む家に引っ越した日，チュニもまじえて入居式が執り行われる。その式で「僕」は次のように宣誓する。

> 僕は宣誓した。イーゼルの上に置いた白くきれいなカンバスに向かって右手を伸ばし，真心からの愛情と血にかけて宣誓した。この家に住んでいる間，僕の若さを再考し，僕の現実を冷徹な目で見つめて，僕が持った不幸と孤独をカンバスの上に切々と描き出すことを。[39]

実を言えば，これが山犬の絵を描きはじめる発端である。「父の全部を画幅の中に」収めるとは，自分の現実を見つめ，自分の不幸と孤独をカンバスの上に描き出すことでもある。

ここで，上では保留した山犬の絵の解釈を試みてみよう。まず，昼と夜の対照がある。空は真昼で岩山は夜である。これは未来と過去の対照と見ることができよう。山犬が空に向かって吠えているのは，未来への呼びかけである。しかし，それは諦念からくるものではない。山犬は3本脚でしっかりと岩山を踏みしめ，胸を張って孤独を征服した孤高の姿で立っている。とはいえ，「空にあるすべてが孤独」であり，未来への呼びかけは今後も続く孤独に対する挑戦状であると言い換えることができる。夜の岩山は父親の顔であるが，その岩山の上には骸骨が散乱し，割れ目ごとにヘビが這い回っている。ヘビは精神分析では男根を象徴するが，ここではむしろ旧約聖書の「創世記」でイブをそそのかすヘビを連想すべきであろう。つまり，不気味に這い回るヘビは人を楽園＝理想から追い出す現実の象徴であり，骸骨は現実が振るう暴力の象徴である。この暴力の犠牲になったのが戦争で片腕を失い，勲章によってしかアイデンティティーを保てなくなった父親，敗北者たる父親であり，父親と同様に傷を負い敗北しそうになりながら，それを克服して3本脚で立っている山犬が「僕」である。さらに付け加えるなら，この山犬たる「僕」は父親の生まれ変わりでもあるだろう。

おわりに

最後に，もう一度『勲章』の構成に立ち戻りたい。この小説は「古い日記帖」「秋の会話

集」「幻生集」の3つの章から成るわけであるが，このうち「秋の会話集」での語りの様式は他の2つの章と異なっているのである。他の2つの章が要約しうる一定の脈絡を持ったストーリーで成り立っているのに対して，「秋の会話集」は独立性の強いいくつかのエピソードから成り立っている。本稿の展開の中では父親との関係を抽出したのであるが，それは実際には様々なエピソードの中にちりばめられているのである。この語りの様式の変容が持つ意味を検証しておく必要がある。

「古い日記帖」では父親の言動を軸に一貫したストーリーを持っている。そのストーリーにおいて，「僕」の一家に生じる葛藤の根源を象徴しているのが父親の勲章であると言いうる。勲章が父親のアイデンティティーを保証してくれるのであるが，そもそも勲章は過去の証しにすぎない。「人民軍5人を素手で殴り殺した」という過去の武勲の証しに過ぎないのであり，現在を，さらには未来を保証してくれるものではない。勲章を唯一の誇りとし，金ぴかに磨く父親は過去の中に生きているに過ぎず，そのために現在の現実世界と親和性を持てないのである。要するに，「古い日記帖」で語られる物語は過去に支配された物語であると言いうる。

それに対して，「秋の会話集」は，「僕」とチュニとのとりとめもない会話，落書き，「僕」からチュニへの，またチュニから「僕」への手紙，春川への旅行，その旅行中のとりとめもないエピソード，さらにはある眠れない夜の出来事等々といったもののモザイクで成り立っている。これは，いわば精神の彷徨あるいは青春の彷徨とでも言うべきものである。そこには父親の影がつきまとってはいるが，「僕」が春川へ旅立つ理由を，「そこに今でも残っていると思われる僕の暗い日々の痕跡を，すべて消すことさえできれば，僕は憂鬱病を少しは治せるというわけです」と述べていたように，いわば過去の中に生きることを拒否し，現在の中に生きようとする彷徨である。そして，この彷徨の中で，次第に父へと接近していく。この章の物語は過去に支配されているのではなく，現在に支配されていると言いうる。

「幻生集」は，ファンチョルとの交流と山犬の絵の制作過程という二つを軸にした物語であるが，ここで語られるのは前章での彷徨の帰結である。「幻生」つまり「生まれ変わること」という章のタイトルが示すように，苦悩の末に父親を客観化し，自分の生きる道を現実の中に根づかせることによって「僕」は「幻生」する。この帰結は未来へと開かれており，過去に支配された「古い手帳」の対極に位置するのである。

『勲章』は父親との葛藤がメインのテーマとなっているが，本稿で示唆したような芸術至上主義的テーマが見いだされたり，本稿では直接言及しなかったものの，引用文のいくつかの中にかいま見られるようなブラックユーモア的な要素や幻想的な要素なども含まれている。それらはいずれも，李外秀の他の作品の中でも繰り返し登場するものであり，別の

機会に論ずることになろう。

注

1　テキストとしては短中編小説集이외수『겨울나기』（東文選，2001〔1980〕年）に収められたものを使用し，以下の注で同書からの引用についてはページ数のみを示す。
2　이외수『내 잠 속에 비 내리는데』東文選，2000（1985）年，p. 245.
3　이외수『그대에게 던지는 사랑의 그물』東文選，2003（1998）年，pp. 175–176.
4　原文では「3. 환생집幼生集」となっているが，「幼」は明らかに「幻」の誤植である。なお，「幻生」とは「生まれ変わること」である。
5　pp. 175–176.
6　pp. 182–183.
7　p. 185.
8　p. 187.
9　p. 188.
10　pp. 191–192.
11　p. 201.
12　p. 176.
13　심청。李朝時代の小説『春香伝』の女性主人公で，親孝行の鏡とされる。
14　p. 186.
15　p. 190.
16　p. 197.
17　p. 196.
18　p. 199.
19　p. 205.
20　p. 251.
21　p. 202.
22　p. 203.
23　p. 202.
24　p. 211.
25　p. 212.
26　p. 216.
27　p. 208.
28　p. 236.
29　pp. 268–269.
30　pp. 264–265.
31　p. 266.
32　p. 267.

33　김동인 단편선『감자 외』문학사상사，2004（1993）年，pp. 268–269.
34　p. 271.
35　p. 278.
36　p. 191.
37　p. 254.
38　p. 253.
39　p. 262.